



風狂・滝 瓢水② 地域史研究者 三善貞司

商いに背を向けた異色の俳人

天衣無縫の生き方を綴った句に溢れる心情

豪商^{かろうや}叶屋の長男に生まれながら家業を怠け、ありあまる家産^{うちじん}を蕩尽(道楽で使いはたす)した俳人^{ひょうすい}滝瓢水は、俳諧の才能だけは抜群でした。

ある学者が、後徳大寺(左大臣藤原実定のこと。藤原定家のいとこで歌人としても有名、『徒然草』に彼の逸話が出る)の名歌、

「ほととぎす鳴きつるかたを眺むればただありあけの月ぞ残れる」

を激賞して、「どうだ。俳諧ではとてもこれほどの文雅は作れまい」と言った瞬間、瓢水は即座に、

「さてはあの月が鳴いたかほととぎす」

と返したので、学者のあいた口はふさがらなかつたと伝えます。本当にうまいですね。

また瓢水は『源氏物語』が大好きだったせいか、よく須磨を訪れ、

「ほろほろと露そふ須磨の蚊遣かな」

と詠んでいます。蚊遣りは今の蚊とり線香のこと。こもつてくすぶることから、「くゆる(悔ゆる)感情を象徴する意味に、文芸では用います。露(涙)に顔をくしゃくしゃにして彼は、何を後悔していたのでしょうか。今も須磨の禅昌寺に、

「本尊は釈迦か阿弥陀かもみぢかな 瓢水」

との句碑が建っています。釈迦は現世の仏、阿弥陀は来世の仏です。また紅葉は今も禅昌寺の名物です。

寛延2年(1749)前橋(群馬県)の大名酒井忠恭が姫路に移封され、着任します。

忠恭は風流大名を自認しており、加古川の別府村に瓢水がいると聞き、領内巡視にかこつけてかごを寄せます。もちろん倒産した叶屋の豪勢な屋敷はなく、土蔵がひとつ残っているだけです。あの優しすぎた母お参が、独りぼっちで死ぬまで暮らした土蔵です。

なにしろ18万石の殿様だ。村人たちはあわてふためきますが、忠恭は平気で汚い土蔵の戸をたたきました。ときに瓢水は65歳の老人です。

忠恭は持参した酒肴^{しゅけん}を勧め、俳諧談義をかわして上機嫌になるうちに、美しい月が昇ってきます。「そなた、あの月を詠め」と忠恭が命じると、へえーと答えた瓢水は座をはずして消えてしまい、そのまま忠恭は一人で夜を明かします。数日経って姿を現した瓢水に村役人たちは蒼くなり、「このうつけ者め。殿様はお怒りじや。わしらまでお手打ちになるぞ」と胸ぐらをつかみませんが、瓢水は平気で「殿さんが月を詠めと言うさかい、ちよい

と須磨まで行って参じました」とにつこり笑います。のちにこの土蔵も売り払ったらしく、「蔵売って日あたりのよき牡丹かな」との句があります。

瓢水は何度も大坂を訪ねています。高名な大坂の俳人松木淡淡と親しかつたからです。淡淡は富裕な俳諧師で、どこで瓢水とウマが合ったのかは分かりませんが、いつも歓待してひきとめ、長逗留をさせています。

「手にとるなやはり野に置けれんげ草」

誰もがご存知のこの句は、淡淡の門人の富商の旦那が、ある妓楼の遊女に首ったけとなり、嫌がる彼女に莫大な金を積んで無理に身請けしようとしたとき、瓢水がたしなめた句です。今でも人生の機微に触れた名句だとよく引用されています。

また京でひどい暮らしをしていたころ、みかねた如流という画家が、数十張の白扇に俳画を描き、「これに俳句の賛をつけて売れば金になる」と渡してくれました。瓢水も喜んで大ぶろしきに包み背負って帰りますが、何ヶ月か経って出会うと、相変わらずみすばらしい姿をしています。

「あの扇どないした」と尋ねると、「へえー、あんまりかさばるんで、途中で捨てました」と蛙の面に水のような顔で答えたので、如流は絶句しました。またあるとき小川に落ちた彼を見て、あわてて農夫がかけつけますと、瓢水は川の中で大あくらをかき、ふところからぼたもちをとりだし、うまそうに食べていたとの話もあります。

宝暦12年(1762)5月、大坂で客死します。行年78。墓は持明院(天王寺区生玉町)にあります。別号富春斎・自得庵。句集に『勝手かくれ』『柱曆』『響の灘』。

代表句「水鳥の首筋重き霜夜かな」。持明院は文人や画家の訪れる寺院として知られ、田能村竹田や浦上玉堂などの著名人が、何年間も泊まっていたことがあります。特に竹田は多くの作画を寄贈しており、戦前は「竹田寺」とも呼ばれました。惜しいことに昭和20年の空襲で、本堂もろとも焼失し、残念です。

瓢水は生涯独身でした。ところが別府にある滝家の菩提寺「宝蔵寺」に、

「滝瓢水翁自得居士筆塚」

と刻まれた碑があり、裏に、

「宝暦十二年壬午五月十七日 胤子富春 播陽門人建之」

と記されています。胤子はふつうは子孫のことですから、彼が死亡したときには子供か孫がいたことになりません。ただし胤嗣であれば後継者ですから、弟子のひとりかもしれない。

滝 瓢水

貞享元年(1684)加古川生まれ。海運業の4代目を継ぐが、家業に身を入れず俳諧を学ぶ。墓碑は持明院(天王寺区)にある。